国立国語研究所学術情報リポジトリ

＜講演＞漢字：その魅力にひそむエンドレス感

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: カイザー, シュテファン メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000903

講演5

漢字:その魅力にひそむエンドレス感

シュテファン・カイザー（國學院大學教授）

Stefan KAISER

國學院大學文学部教授。著書に、*Teach Yourself Japanese* (Hodder & Stoughton、2003年)、*Japanese: A Comprehensive Grammar* (共著、London/New York: Routledge、2000年)、*The Western Rediscovery of the Japanese Language*. 8 Vols.（編著、London: Curzon Press、1994年）ほか。

こんにちは。私は通常は文字の学問を専門としていますが、今日は特に非漢字圏といわれる学習者に対する漢字教育、あるいは漢字学習のことを考えてみたいと思います。

◆漢字の魅力 —漢字教材にみられる形容辞—

漢字教材にみられる漢字に関する形容辞についてです。

exotic and alien characters

〔文献11〕

pictographic writing is often far superior to the alphabetic writing of the Western world

〔文献8〕

Crazy for Kanji: A Student Guide to the Wonderful World of Japanese Kanji

〔文献12〕

下線の要所だけを日本語に直すと、exotic and alienは「異国風で異質」、pictographic writingは「絵文字」、はsuperiorは「優れている」、*Crazy*は「夢中（狂?）」となるのですが、サッカーのベッカムの息子（11歳）がこの「狂」を刺青のような形で手首の辺りに付けていました。これはcrazyの訳語なので、それでもいいのかなと思いましたので、括弧内で示しました。あるいは「漢字タトゥ」などというものがあって、どうもそちらの方は漢字の人気度が高いようです。例えば話題になっているセルビアのプロテニス選手がドストエフスキーの語句を刺青のような形で腕に彫っているのですが、キリル文字ではなくて、わざわざ日本語で書いてあるのです。それほど漢字の魅力は強いところがあるわけです。そういう文字、つまり、通常ただ読むためや書くための文字ではなくて、それを超えた属性を持っている文字ということになると、いわゆる漢字神話が生まれてくるのです。

◆「漢字神話」

先ほど所長のご挨拶にありました、「漢字はぱっと見て意味が分かる」というのも実は神話なのです（けっして科学的に証明されたものではないからこそ、神話です）。これは「表意神話」といわれているものです。つまり、いかにもそうでありそうなのだけれども、よくよく調べたりすると、どうもそうではない、思い込みにすぎないということです。

Ideographic（表意）, Universality（普遍）, Emulatability（模範とすべき、文献13参照）, Monosyllabic（単音節）, Indispensability（不可欠）, Successfulness（成功済み）

〔文献7、cf 第6回国立国語研究所国際シンポジウム「国際社会と日本語」（1998）〕

二つだけ取り上げます。3番目のEmulatabilityは難しい言葉で書いてあるのですが、「模範とすべ

き」という意味です。これは有名な英語の論文でいわば実施されているので、文献13として挙げているものです。タイトルを日本語にすると「読書障害のあるアメリカ人児童は、中国の漢字で表現された英語の読みが簡単に習得できる」という研究論文です。たったの30字しか使っていなかったのですが、これは有名で、どうも内容がタイトルよりはかなり限定的なので悪名高き論文でもあります。これがまさしく模範とすべきことだ、つまり、英語できちんと読めない人たちには漢字さえ与えれば問題はすべて解決するというわけです。それから、普遍言語として漢字を使おうとする19世紀の考え方もありました。これは語順や文法要素など考えるともちろん無理がありますが、それなりに魅力的なアイデアとして一時ははやっていました。

もう一つだけ取り上げますが、最後のSuccessfulnessは「成功済み」です。これは実は国研の以前のシンポジウムで鈴木孝夫とやり合ったことがあります。鈴木さんは「日本が明治時代にあれだけの進歩を短期間のうちにできたのは漢字もあってのこと」という趣旨のことを質疑の中で言われたわけです。それに対してカイザーが「それは論理にかなっていない、つまり、『にもかかわらず』ということは否定できないのではないか」と指摘したら、鈴木さんから「西洋の論理がすべてではない」とやり返されたのを今でも覚えています。

◆学習者にとっての日本語と漢字 —授業・学習時間のデーター

学習の方に目を向けて、幾つかのデータを出したいと思います。

これは成人学習者のばあいですが、アメリカ国務省の各国語のプロ（外交官あるいは政府職員）を育てるところでは、どのぐらいの授業時間で各言語を習得できるかを比較した表です（表1）。これはあくまで英語話者にとっての話なのですが、フランス語やドイツ語あたりは600時間程度、23～24週ぐらいで習得できます。それに比べると、中国や日本の言葉などはその4倍かかってしまうような計算になるわけです。これは才能やモチベーションのある成人学習者で、授業時間しか数えていませんので、それとプラス宿題という計算になるかと思います。

類 型	言語例	授業時間	週間
I	ロマンス、スカンディナビア、ゲルマン言語など	575～600	23～24
II	フィンランド、ヘブル、ロシア、トルコ語など	1100	44
III	中国、日本、コリア、アラブ語	2200	88

表1 FSI (US Dept. of State)授業時間比較

レベル	漢字数	基準学習時間数	漢字圏実績	漢字圏外実績
4級	150	150時間程度	200～300	250～400
3級	300	300時間程度	375～475	500～750
2級	1000	1000時間程度	1100～1500	1400～2000
1級	2000	2000時間程度	1800～2300	3100～4500

表2 日本語能力試験のレベル別学習時間レベル

次は日本語能力試験の標準的な学習時間数の表です（表2）。基準学習時間数は主催者側のデータです。

級別の後に漢字数が書いてあります。最初の4級は150字で、1級になると2000字なのです。その学習時間として、1級に達するまでには2000時間となっているわけです。日本語学校に通っている生徒さんの実際の学習時間を計ったデータによると、漢字圏の人たちは大体そのぐらいで習得できるのですが、漢字圏以外の人たちになるとかなり開きがあります。しかも漢字数が増えれば増えるほど開きが広がるということを示しています。

◆日本人児童の漢字学習

日本人の学習にはあまり触れません。ただ、小学校など義務教育では9年、高校まで含めると12年かかってしまうわけです。それに比べて、欧米では基本的に文字の学習は小学校4年で終了します。だからこそ、明治時代には危機感があり小学校4年では読み書きは無理だと分かってくると、それを何とかしようという動きがあったのですが、今その問題はまったく眼中にないようです。

もう一つ、日本とイギリスの国語の初等教育の比較ですが、これはよく分からない、古いデータですが、最近の漢字関係の本の中で引用されています。原典で確認しても、「英米の教育能率は日本の四倍半」という劇的な見出しの後に下記の表3にまとめたデータが並んでいるだけで、どこのデータなのか、その根拠は示されていないないのです。ただ、この種の比較データは非常に得難いので、あえて再掲載しました。ちなみに、唯一知られている日米の小学生の大掛かりな比較調査であるStevensonら〔文献15〕では、日米（台）の教科書語彙全数を共通して7000だと言っています。

◆伝説上の漢字の創始者「倉頡（そうけつ）像」

ここで間劇です。伝説上の漢字の創始者「倉頡」（漢字はいくつかバージョンがあるが）、ご紹介します（図1）。

何か特徴的なところはお分かりですか。幾つかあるのですが、これが一番分かりやすいでしょうか、目の玉が多いのです。

これについて、武田雅哉が『蒼頡たちの宴』の中で次のようなことをいっています。「われわれ漢字を使用する人間ときたら、残念なことに、蒼頡のような四つ目ではない。つまり、『目玉が二つ足りない』…漢字という本来はとてつもなく偉大なはずの発明品を、まっとうに使いこなすことができず、むしろこれを持てあまし、その管理と保全とに多大な苦労を強いられてきたのである」〔文献3〕。

図1 倉頡像

これは中国と日本、つまり漢字圏についていって

	日 本	イギリス
小学校における国語の授業時間数（時間/週）	11.3	8
全授業時間数に占める割合（%）	44	31
覚える異なり単語の総数	8,900	48,000
100の漢字（漢字）・単語（英）を教えるのにかかる時間数（分）	268	36

表3 日本とイギリスの国語の初等教育の比較（文献2、文献6による）

いることです。漢字圏で目玉が二つ足りないとなると、非漢字圏では果たしていくつ足りないだろうか。あるいは、日本における大衆教育が比較的新しい現象だということを考えると、果たして漢字を通して大衆教育ができるのかという疑問が私にはあります。

◆音符の有用度

システムとしての漢字に関するデータを少し挙げます。一つは、音符との「一致度」の観点から調べたものです（表4）。

1.0	57.6%
0.75	18.3%（「1音素の違い」）
0.5	9.4%
0.25	5.0%
0.0	9.7%

表4 音符との一致度（文献4による）

例えば1.0の一致度、つまり完全に一致するものは58%近く、それから次の4分の3程度が18%ぐらいあるといったところです。時間の関係で詳細は割愛しますが、この4分の3について著者が示しているのは、音素1個の相違といってもかなり食い違っているという認識です。つまり、0.75は漢字の音読みを音符などから当てられる可能性がかなり危ないという認識です。0.5以下だと、全く参考にならないぐらいだとも言っています。ところが、文献5では同じデータを3段階に計算し直している。完全一致はそのままですが、0.5から0.25までの3つの数字を「ある程度一致」として33%に統合しているのは、もとの論文の主旨とはまったく違います。その結果、「一致しない」ものはたったの10%になってしまいます。漢字の音符は9割程度助けになるのだと、かなり誇張した数字を見せたいあまり、データを改ざんして書いているわけです。

文献14は残念ながらドイツ語で書かれたものなのであまり知られていないのですが、非常に厳密な方法で常用漢字を分析した研究書です。漢字とその音符に存在する類似性が歴史的にどの程度温存されているかの関係をベースにしている文献4と違って、同じ音符をもつ常用漢字を比較して、発音上どれだけ共通性があるのか調査したものです。結果だけをいうと、文章のなかで3字に1字が形声文字であり、その半分がさらに一定した音読みを持っている場合、そういった最善の条件でもせいぜい16～17%ぐらいが一定の読み方になるという計算を示しています。そうすると、システムとしての漢字はなかなか学習の上では利用できないことになるわけです。

◆意味・形の記憶術

では、非漢字圏学習者はどうやって漢字を覚えるのか、これが次の問題になります。文献9はアメリカ人のHeisigという人が書いた教材です。インターネットでの利用者のコメントなどを見てもらうとよく分かりますが、これは自学習用教材として非常にはやっているものなのです。特徴としては、2冊に分かれていて、最初の1冊では漢字の読み方を全く無視して、漢字の意味と形だけを学習することにしぼっています。漢字を基本的な部品に分けて、漢字の全体の（中心的な）意味にニックネームを与えて、構成要素の各部品をつなげるための、英語によるストーリーを付けるやり方です。著者によると、本人はそれで1カ月で1900字を覚えたそうです。なかなか凡人にはまねできないと思うのですが、それを可能にしたのは、いわゆる記憶術です。私の話のタイトルにある「エンドレス感」というのは、電話帳にあるような、無関係な情報をどんどん頭に放り込んでいくようなプロセスも含んでいるわけですが、そうならないように少しでもシステム化しようというものです。

1冊目でまずは大きなストーリーを出して、学習者にそれを覚えさせます。だんだん簡略化していって、最後はエレメンツだけ提供して、学習者が自分でストーリーを考えます。つまり、だんだん自立するような

システムになっているわけです。一つだけ実際の例をご覧いただくと、例えば通し番号469の「歌」という漢字があります。この漢字では「カンカン（can-can）ガールのコーラスラインが歌っている」というプロットだけを示します。割合と単純化されている部分です。そして、「聴衆にあくびしか反応させない理由については、あなた自身にお任せしよう」、自分で考えなさいとシチュエーションを与えるわけです。

121 utensil　器

この漢字の情景は快いものではない。大きくてふわふわしたセントバーナード犬（*St. Bernard dog*）がテーブルの上に伸びきった状態で横たわっている。蒸し上がっていて、野菜で詰め物にされたり、飾られたりしていて、脚が上を向いて、口にリンゴをくわえている。テーブルの各コーナーにはどん欲で空いた口（*mouth*）が、器（**utensils**）がもたされ宴会が始まるのを待っている。

122 stinking　臭

この字は動物世界にはもう少しやさしい。我が友のセントバーナード（*St. Bernard*）が健在で、鼻（*nose*）が疑い深くどこかにある臭い（**stinking**）ものをぴくぴくと探しあてようとしている。

277 road-way　道

キーワードは通過するための道路（**road**）と何かをするための道または方法（**way**）という意味をもっているが、前者の方がイメージを作るのにより適している。部品は「道路の首」（the *neck* of a *road*）と読まれる。交通が止まってしまった、込み合った車道（**road-way**）を想像しなさい。我々が通常 "bottle*neck*" と呼ぶ状況。

469 song　歌

この漢字の歌（**song**）はカンカン（can-can）ガールのコーラスラインが歌っている。聴衆にあくびしか反応させない理由については、あなたにお任せしよう。

575 the following　翌

Feathers...vase. Be sure to contrast the connotation of this keyword with that for next (FRAME 471).（次、**next**, lack of ice）（立、**stand up**, vase）

◆イメージ化の考え方と例

イメージ化の話にうつります。「次の課題は混合漢字を作り上げることだ。想像力と記憶がものをいうのはここのところだ。目標は、精神の目にショックを与えたり、むかつかせたり、魅惑させたり、からかったり、あらゆる方法でおもしろがらせることによって、キーワードと密接に結びついたイメージを焼きつける点にある」ということです。次のものがその例の1つです。

245 cow　牛

この漢字を、ロードローラーにひかれたばかりの牛（**cow**）の落書きと見立てたらどうだろうか。最初の一画の小さい点が片側に回った頭で、次の二画が四本の脚。

◆読みの記憶術

読み方に関しては、別の1冊が用意されているのです〔文献10〕。それがどのようになっているのか、例えば四つか五つぐらいの漢字をいろいろな観点からグループ化しています（**Part One, Chinese Readings**）。同じ音読みを持っていて、同じ部品を持っているもの、あるいは日常的に役に立つ言葉、種々雑多な読み方や補助的な読み方をするもの、その中のよく使うもの、あまり使わないものなどに分けます。つまり、これは本来システム化できないものを無理にシステム化しているように見せかけて、結局それで常用漢字を全部カバーしているわけです。

Part One, Chinese Readings

Ch. 1 The Kana and their Kanji

a、二、三、女...、b、計、毛、礼...

Ch. 2 Pure Groups

A、4字以上、中、忠、沖（沖天）、B、3字以下、C、2字以下

Ch. 3 One-Time Chinese Readings

圧、米、別、没、白（黒白）...

Ch. 4 Characters with No Chinese Readings (in this book)

結、旭、亘、只、貝、頁...

Ch. 5 Semi-Pure Groups

次（次第）、姿、資、諮／盗;交、校、効、郊、絞／較...

Ch. 6 Readings from Everyday Words

三画、元（気）...

Ch. 7 Mixed Groups

A. Mixed Groups of 2 Readings Only

同、銅、胴、洞（洞察）;筒（水筒）、桐（桐油）...

B. Mixed Groups with 2 Exceptions Only

女（女性、性分）、星（星座、明星）...

C. Remaining Mixed Groups

（地図、地震、=Everyday Words）

Ch. 8 Readings from Useful Compounds

（土（土地）（土曜日、=Everyday Words））

Ch. 9 A Potpourri of Readings

弱肉強食、微笑...恐妻...鯨（鯨飲馬食）...

Ch. 10 Supplementary Readings

A. Common Supplementary Readings

（右（左右）（右翼、=Useful Compounds）、欄、裏、猶）

B. Uncommon Supplementary Readings

（謀（謀反）（陰謀、=Semi-Pure Groups））

また、訓読みの読み方を覚えさせる方法を示しています（**Part Two, Japanese Readings**）。音読みだと音符があって、先ほどの数字（テキストの中では16−17%）であまり役に立たないことを示したのですが、それでもうまくグループ化すればそれらしく見せることはできます。しかし訓読みになると全くシステムが成立しないはずです。で、この人がどうしているかというと、「あいうえお」「かきくけこ」に全部漢字を当てるわけです。ここに「うつわ」という例があるように、「う、つ、わ」は「卯、津、輪」の漢字でそれぞれ意味を与えて覚えさせます。どういうイメージになるのでしょう、「どこかの港でうさぎが踏み車を踏んでいる」なのでしょうか、そういう覚え方をさせるわけです。そこまでしないと、非漢字圏学習者はなかなか漢字が覚えられない（あるいは、覚えられるという期待感を与えられない）ということを示したかったわけです。この本は一部では、漢字のバイブル（聖書）と呼ぶ人もいるぐらい広く普及していて、各国語にも翻訳されています。

Part Two, Japanese Readings

Primary Phonemes

亜井卯江尾蚊 mosquito 切（る）...

Voiced Phonemes

画犠具下碁座...

Long Vowels

（多（い）凍（る）背　通（る）設（ける）夕...

Diphtongs

巨（人）写（真）（洋）酒　署（名）茶　著（者）...

◆「この字は覚えたけど」症候群

「エンドレス感」の内容を私のよく使う言葉で言うと、「この字は覚えたけど」症候群です。これがかなり学生の中に見られる現象です。特に単純な漢字に多い現象なのですが、漢字の「日」を見ると、中国語では1つ、韓国語でも1つですが、日本語では9通りの読み方があります。

その日は3日の土曜日

1日は一日中何もしなかった

昨日はどうも!
昨日は、ごちそうさまでした
日本（にほん? にっぽん?）
=9とおりのよみ（cf. 中国語 rì、韓国語 il）

確かに一つ二つは何かの法則で説明がつくものがあるのですが、それでも七つぐらい残ります。なぜそれが困るのかといいますと、前に覚えた内容が次に応用できないのです。次にその字が出てきたときに最初の読み方を当てはめようとすると、「いや、違います」、さらにまた出てきたときに、「今度もまた違います」というわけです。これは学習者のモチベーションにとっては非常にまずいことなのです。習ったはずなのだけれども、違うのだということです。

先ほど熟字訓などの話も少し出ましたけれども、地名や人名の漢字使用になると、本当に犯罪に近いような面があります。あるいは逆に言うと、これは全く遊びの世界で、通じることを全く考えていないのです。地名の後ろに付く「ちょう」や「まち」も現地の人でないと分かりません。自分の名前を誰にも読んでもらえないという人もいっぱいいると思うのです。これでいいかどうかという問いかけで終わりたいと思います。

文献

1 島村直己（2005）第9章　国語教育と漢字　朝倉漢字講座4
2 高田琴三郎（1935）文字を使う法　千倉書房（山田尚勇、2004）
3 武田雅哉（1994）蒼頡たちの宴-漢字の神話とユートピア- 筑摩書房
4 野村雅昭・伊藤菊子（1978）漢字の表音度 計量国語学11-7: 306-311
5 林大監修（1982）図説日本語-グラフで見ることばの姿- 角川書店
6 山田尚勇（2004）第1章　情報化社会と漢字　朝倉漢字講座5
7 DeFrancis, J. (1984) The Chinese Language: Fact and Fantasy. University of Hawaii Press.
8 Foerster, A., Tamura, N. (1994) Kanji ABC: A Systematic Approach to Japanese Characters. Tuttle.
9 Heisig, J. D. (1977) Remembering the Kanji Vol. I: a complete course on how not to forget the meaning and writing of Japanese characters. Japan Publication Trading Co.
10 Heisig, J. D. (1987) Remembering the Kanji Vol II: a systematic guide to reading the Japanese characters. Japan Publication Trading Co.
11 Kanji Text Research Group, University of Tokyo (1993) 250 Essential Kanji for Everyday Use. Tuttle.**12** Kushner, E. (2009) Crazy for Kanji: A Student's Guide to the World of Japanese Kanji. Stone Bridge Press.
13 Rozin P., Poritsky S., Sotsky R. (1971) American children with reading problems can easily learn to read English represented by Chinese characters. Science 171:1264-1267.
14 Stalph, J. (1989) Grundlagen einer Grammatik der sinojapanischen Schrift. Wiesbaden:Harrassowitz.
15 Stevenson, H.W., Stigler, J., Lucker, G.W., Lee, S-Y. in collaboration with Kitamura, S., Kimura, S., Kato, T. (1986) Learning to Read Japanese. In Stevenson et al. (eds) Child Development and Education in Japan. New York: Freeman, 217-235.

※カイザー氏の講演は41ページよりはじまります。